

第5回 フォーラム報告書

平成19年11月1日

開 会

[廣 田] 非常にお忙しいところを、今日のフォーラムにご参集くださいますようお願いいたします。

このフォーラムは平成14年、2002年からやっております。趣旨につきましては、先生方にも報告書が届いていると思いますが、そこにも書いてありますように、私の乏しい頭脳を振り絞って「進歩主義の後継ぎはなにか」という命題を立てました。関西の国際高等研のフェローのときにやらせていただいたのが始まりです。

内容は、私は人類の非常に優れた点だと思いますが、私たちは必ず良いもの、今よりもより高いものを志向するという特徴があります。私はそれを大雑把に進歩主義と考えています。しかし、この良いもの、より高いもの、より高次なものというのは実は非常に曲者でして、こういうものを測る尺度はそんなに簡単ではなく、現実を見ると必ず2面性というか、何かがついて回って来るというジレンマがあります。

もう一段進歩主義を推し進めなくてはいけないと私は思いました。これは夢のまた夢かもしれませんが、これを「後継」と考え、それを模索したいと思ったのです。先生方も大学あるいは研究所でご活躍になってこられている方ばかりです。政治家や官僚とは違って、知的な活動を通じて、こういう問題に立ち向かっていこうではないかというのが私の考えです。

まず、いろいろな知的活動をされている先生方にご講演をお願いし、それを中心に討議していただくことで、後継ぎを見出していきたいという趣旨です。このような知的活動は、広い範囲にわたっており、非常に原理的なものから社会との接点が非常に濃いものまで、多種多様です。これは自然科学に限らず人文・社会科学も全部同じで、その間には切れ目はありません。それらを、特にどちらがということはなく、すべて広く知的な活動と捉え、そこからこの後継ぎの問題を提案できればと思っています。

知的活動のうち、原理的なものは難しいことが多くてしばしば見通しが悪いのに対し、社会との接点が多く応用に近いところは功罪がはっきりするということがあります。しかし両者は二つに分けられるものではないし、また、一つの活動でもいろいろな面があると思います。

日本経済新聞をお読みになった方はご存知ですが、先月1か月間、青木昌彦さんという社会

経済学の分野で非常に活躍した方が履歴書を書いておられました。この方は若いとき、ちょうど学園紛争の真最中で、ブントにも属して活躍されました。その後しだいに、理論経済学から、現在では、全くの体制派として、活躍しておられます。この方も、その分野で後継ぎを模索されていたのではないかと私は思います。行き方は当然違いますが、いろいろな方が私の提案と同じ種類の活動をしておられることでしょう。

本日は7人の先生方に、大体40分をめぐりご講演をお願いいたします。講演会は、講演だけでは大したものにはなりません。ご講演は大変ありがたいけれども、それと同時にご参集の方にぜひ討議をお願いしたい。そのために講演の後に20分ずつ討議の時間を用意させていただきました。

世の中にはたくさん講演会がありますが、極端な場合、自分の担当の時間に出て来て言いたいことだけ言って「私は忙しいですから」とさっさと帰ってしまうお忙しい先生方もおられます。そういう講演会の意義を、全く認めないということはないですが、メールで何度もお願いしましたように、討議を通じてもっと実のあるフォーラムにしたいと思います。

このため、記録をとらせて頂きます。なかなか厄介な作業ですが、ご講演を昔でいうテープ起こしをして記録に残します。ディスカッションもできるだけ忠実に記録に残します。あの時は人から言われて反射的にこう言ってしまったが、あれは少し誤解を招く発言だったなど、いろいろあるかと思いますが、原稿をできるだけ早い機会にお送りし、書き換え、あるいは追加、削除していただき、十分ご納得のいく形でプリントにしたいと思います。

資料をお使いいただくと思います。全部収録するのが理想ですが、そうもいかないのが、厳選していただいたものを採録します。資料も、これだけでは分かりにくいという場合には修正していただいて結構です。昨今は知的財産権の問題がありますので、もし何かリプロデュースする場合には、再録許可はご講演いただいた先生方とっていただくようお願いします。

討議の一環ですが、本日この会の後、2時間ほど懇親会を宿舎で開きますので、そこでのやりとりは記録しません。十分お話し合いをしていただければと思います。

本日は、芳賀徹さんにご出席をお願いしてご快諾いただいていたのですが、外国に行かなければならなくなり、急遽キャンセルになりました。まことに残念です。私は、このフォーラムには、異なった分野からご出席いただくことをモットーにしてきましたが、今回は非常に残念なことに、いわゆる人文系の方がゼロになってしまいました。お許しをいただきたいと思います。

改正したプログラムがお手元にあります。濱先生がご都合で午後比較的早い時間にここを出発しないといけないと伺いまして、最後に予定しておりました濱先生のご講演を午前の最後に

移動いたしました。最後の講演は高畑さんに無理にお願いしました。高畑先生には第1回、第2回で非常に良い講演をしていただきましたが、再度登場していただくことにしました。ご了承くださいたいと思います。

お互いによくご存知の方ばかりだと思いますが、これから数分間自己紹介をお願いします。

[小 林] 私の専門は素粒子の理論です。長いこと高エネルギー研に居りました。1年半前に退職して、遊んで暮らしていましたが、この10月から、学術振興会の理事を仰せつかり、また忙しい世界に戻ってまいりました。どうぞよろしくをお願いします。

[本 島] 私は核融合科学研究所の本島です。今日は大変重要で、かつ興味深いフォーラムに参加させていただきありがとうございます。去年は急遽欠席してしまい、大変申し訳なく思っております。私の専門はプラズマ物理学と核融合エネルギー研究です。特に実験に軸足を置いて、若いときから研究をしてきました。今日の私の話は、進歩主義を支える分野の一つとして核融合分野が成長すべきである、という観点から話を組み立てさせていただきます。研究はいろいろな分野で急速に進んでいます。それを学術としてしっかり発展させていくにはどうすればいいかは大問題であり、コミュニティを挙げて、そしてコミュニティ外の皆様ともいろいろ議論をしているところです。その意味で今の日本はずいぶん忙しい時代になってきたとも思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

[鴨 下] 私の専門は医学、小児科学というより臨床の医者です。大学を離れてから十数年経ち、研究的なことはおよそしていません。こういうそうそうたる学者の先生方の中に入る資格はないのですが、廣田先生と個人的なつながりがあり、第1回と第2回に多少発表をさせていただきました。

私は第18期の学術会議の会員でした。医歯薬はその第7部です。部長が「進歩主義の後継ぎは何か」というフォーラムへの招待を受け「誰か出席して欲しい」という話になりましたが、誰も行くものがないくて、私はそのときにたまたま副部長でしたので、部長の命令で出席しました。それ以来なんとなくつながっています。今日は午後、あまり学問的ではない医療の、それも医療政策的なことを説明させていただこうと思います。よろしくお願い申し上げます。

今回、「進歩主義の後継ぎはなにか」のご案内の一つにだけ「進歩主義の後継ぎとはなにか」という書類がありました。これは趣旨が変わったのかと思いました。一字違いですけれどもずいぶんニュアンスが違います。そもそもシンポジウムとは何かということを議論するのだと、とても私には出る資格はないのですが、ここへ来て安心をいたしました。

[塩 谷] 私は東京大学大学院理学系研究科の塩谷です。私の専門は現在は化学ですが、もと

もと薬学の畑におりました。博士課程を中退し、広島大学、分子研、また広島大学、また分子研、東京と、十数年の間に12回ぐらい引越しを繰り返し、転々といたしました。分子研のときに総研大を併任させていただきましたので、その関係で廣田先生がお声をかけてくれたと理解しております。廣田先生がわざわざ私の研究室にまでお越しいただき、本フォーラムの趣旨をご説明して下さいました。この進歩主義という言葉をお聴いたときから私は腰が引けまして、どうしたらいいか困っておりました。今日は多分たたかれ役というか、私が何を言っても、君それは違うんじゃないかと、そういう形でこの会を盛り上げていければと思っております。

私はものづくりの分野にいますので、ものの見方は自分なりに持っているつもりでおりますが、今回こういうテーマをいただきましたので、私なりにいろいろ考える時間がございました。いろいろ考えていますと、今自分がやっている研究が非常にみみっちいものに見えてきて、あまり良くないので、逆にこれを機会にもう一度自分の研究、ものの見方、考え方というものを直してみる、そういう非常に良い機会ではないかと捉えております。今日はいろいろ教えていただくことが多いと思いますがよろしく願いいたします。

[濱] 私は濱と申します。一つだけ他の方と違っているかも知れないと思うことがあります。それは、教授になりましてから広島大学、大阪大学、東京大学、医科研究所、生理学研究所、早稲田大学と5か所を流れ歩いた経験があります。そのメリットはいろいろなところにお友達ができたことでした。またこの体験を通して分かったことは、それぞれの大学で違った決まりがあって、これはできませんと言われる事の多くはその大学の慣例でしかなくて、規則上本当にできないことは割合少ないということでした。例えば、私は東大に移りましたとき、或る分野の専門の方を非常勤講師として呼び出して大学院生への集中講義を御願したいと事務に申請しましたら、非常勤講師は1年間の辞令を出さなければいけないので、そんなことはできないと言われました。私が阪大では集中講義の短期の発令ができたと言うと、事務の返事は「地方大学ではできるかもしれないけれど東大では出来ない」という返事でした。結局辛抱強く事務を説得して、地方大学風の慣例を作る事が出来ました。同じ様な事は阪大でもありましたし、岡崎の研究所でもありました。

結局良い教育、良い研究に必要な環境は自分で作るしかない事、しかもその可能性は可成りあると言う事が分かりました。但しこれは教授会の独立性が保たれていた時代の事で、法人化後の大学、研究所の現状は全く変わっていますので、私のこの手のお話は全く役に立たないかもしれないと思っております。

[北川] 私は北川と申します。濱先生とは全く逆に、私は統計数理研究所というところ一筋

に三十数年勤めております。私はもともと数学科にいましたが、非常に幸運なことに、昨年京都賞をとられた赤池先生が数学科に非常勤講師として講義にこられまして、それまでに受けていた証明・定義の講義と全く違うスタイルで、統計の、それも従来の統計と違う統計のお話をされまして、その影響を受けてその翌年、74年ですが統数研に入れていただきました。それまで全く統計学をやっていなかったのですが、研究所に入れていただいて、実ははじめは3年ぐらい籍を置こうと思っていたのですが、入ったとたんにとっぴりとのめり込んでしまい、三十数年統計をやってきました。統計といっても時系列解析といわれるものですが、時間的に変動する現象の解析ですが、その研究をずっとやってきました。法人化した時点で、ご承知かと思いますが、総数研は遺伝研、極地研、情報研の4つで情報システム研究機構というかなり新しいタイプの形の機構をつくりました。これは非常に広い分野にわたっており、私は個人的に面白いと思っていますが、一方で、評価、研究、教育もやらなければならなくなりました。非常に小さな機構ですので将棋のコマみたいに何でもやらされる理事になって、特に評価が大変で、残念ながら自分の研究はほとんどできないという状況です。「進歩主義の後継ぎはなにか」というすばらしいタイトルをいただいたのですが、あまりど真ん中のお答えになるようなお話はできないと思いますが、私の考えを述べさせていただきます。よろしく願いいたします。

[高 畑] 高畑と申します。まさか副学長になるとは思わなかったんですが、小平先生から強く言われまして、しかもそれが普通でしたら6年ですむはずなのに、法人化したので任期が重なってしまいまして、もう7年目に入っています。もともとは遺伝学研究所で集団遺伝学の理論的な研究をしておりまして、今北川先生がおっしゃった確率論は私の先生であった木村資生という人が使っておられましたので、私もそれで一人前というか、ようやく国際誌に論文が書けるようになりました。それはそれで自分にとっては充実した17年間だったと思います。

その後、総研大にきました。そのミッションは新しい学問分野を創設するということでしたが、やはり若かったと思うのですが、ああそうかと、簡単にひきうけ、深みにはまりました。そう簡単に新しい分野ができるはずがないだろうというご批判もずいぶんいただいた気がしております。とはいえ、いろいろ自分で考えて自分の研究をある意味で生かしたものをここに何とかつくりたいと思いました。やってきた結果、先導研の専攻を立ち上げることになりましたが、そこではこういった自分の学問分野だけではなくて、もう少し大きな目で学問と社会とのかわりを考えたいと思ってここまで来たような次第でございます。

今、副学長であるにもかかわらず、ここの教員が15人しかなくて、しかも自立性を持って

やるということを宣言してきましたので、みんな借り出されまして、私も講義を受け持たされています。それは、「生命科学と社会パート2」というのです。パート1は長谷川真理子さんがおやりになるのですが、パート2が先に走ることになりました。今日はこの講義に関して、「進化における進歩」という話をさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

[小 平] 飛び入りでございます。総研大の学長の小平でございます。今日は、皆様によくおいでくださいましたというご挨拶だけに参りましたが、それだけですと廣田前学長からお叱りを受けそうですので、最初の本島先生のお話までを伺わせていただこうと思っております。こういう会議に学内外から大変お忙しい先生方がこの重要なテーマのためにお集まりいただきまして、総研大としてもうれしく、お礼を申し上げます。先ほど濱先生から大学はいろいろしきたりがありますけれど、それは単にしきりに過ぎないのだというお話がありましたが、総研大はそういうしきりが少のうございます。廣田先生の方針といいますか、そういうものを私も受け継ぎまして、変幻無碍にいろいろなことを試みておりまして、今、高畑副学長が話しましたようにいろいろな新しい試みを、多少しすぎている気味もあるかと思いますが、それぞれに皆さん育てていっているのではないかと思っております。ではどうぞ。